

## P9-301

### 新カリキュラムの取り組み紹介「生活行動からみたからだ」

姫路赤十字看護専門学校

○柳 めぐみ

看護実践を行ううえで、解剖学生理学の知識は不可欠である。医学は疾病の解明と治療のために、身体を細分化し、それぞれの臓器の構造と機能を明らかにしている。しかし、看護は対象の生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整えることであり、そのためには対象である人間を全人的にとらえることが必要である。人間は動物が本能によって行動するのに対して、自らの認識によって自然に働きかけ、自然を変え、社会を作り、日々「生活」を営んでいる。本校では、従来より解剖学と生理学を一緒にし、解剖生理学として看護教員が教えてきた。平成21年度のカリキュラム改正では、さらに生活行動に重点をおいて科目の構築を行った。科目名を「生活行動からみたからだ」とした。息をする、食べる、動く、トイレに行くなどの生活行動を軸組みにしている。まず最初に、学生自身で生活行動とは何かについて考え、カードに書き出し、グループでまとめた。「整容、生きるために必要なこと、娯楽、感情、運動、コミュニケーション、感情」などの項目を抽出した。「愛をはぐくむ」「絆ふかまる」などもあった。「息をする」という生活行動には、呼吸器、循環器が含まれる。生命の発生に遡り、単細胞であれば細胞膜を介して酸素を取り入れ、自己化し、二酸化炭素を排出できたが、進化の過程で多細胞となり、役割分担として呼吸器官が必要になったというように、歴史的な背景にふれながら、「生活している人間」の「身体の構造と機能」を学ぶ。実際に呼吸音を聴診したり、パルスオキシメーターで酸素飽和度を測定したり、体験を大切に授業を行っている。医学モデルでなく、生活モデルで対象を捉えられるようにと願い、日々模索している。

## P9-303

### 新配属者教育の現状～プリセプター制度を導入して

伊達赤十字病院

○白石 智美

【はじめに】内視鏡や放射線科の看護は医学の進歩と共に変化し、専門性に配慮した教育が求められている。しかし、学生実習を含めほとんど経験せず、配属されてから初めて触れる医療機器に遭遇する。これまで得た知識や理論を、検査部門で提供する看護に結びつけられずとまどう場合がある。そこで、新配属者が早く適応できるように、平成14年からプリセプター制度を導入した。

【目的】プリセプター制度は新配属者の精神的負担を和らげ、段階的に経験し検査部門看護を習得するために有効か検討した。

【方法】1) 現在の内視鏡スタッフにアンケート調査2) 配属状況・勤務体制の特徴3) 新配属者の精神的負担の背景4) 到達スケジュールとチェックリストの作成5) 定例カンファレンス導入とその効果を検討項目とした。

【結果】1、アンケート結果1) 全スタッフが新配属時に困惑した。2) ERCPは、ベテランスタッフでも難しい検査に挙げられた。3) 理由は処置具の多様化であった。4) 全スタッフがプリセプター制度を経験し、検査部門においてプリセプター制度は有効であるとの結果であった。2、新卒者の配属は過去になかった。休日・休前日は待機制であり、配属より6ヵ月後に待機要員となる。3、新配属者はゆとりある教育体制を保障されているわけではない。スタッフは一日でも早くメンバーとして働ける看護師を求めてしまうのが現状である。緊急処置に対する判断能力、問題解決能力を養わせることも重要であるが、期待度が大きいほど新配属者の精神的負担は大きい。4、到達度の確認・把握を行うことができ、有用であった。5、他のスタッフからのアドバイスや全体での到達度の把握ができ、無理なく検査部門看護を習得できた。

【結論】プリセプター制度導入は、新配属者の精神的負担を和らげ、スムーズに検査部門看護を習得するために有効である。

## P9-302

### 理念の具現化研修を実施して

小川赤十字病院 看護部

○川崎 つま子

当院看護部は「人を大切にする看護を実践します」の理念を掲げ、看護の質の向上を目指している。しかし、理念を理解し、日々意識している人は少ないように思う。理念が絵に描いた餅になってはいないだろうか？一人でも多くの看護職員に、看護部の理念の意味を考え、日々の看護実践に取り組んでもらいたいと考え、「理念の具現化研修」を実施したので報告する。

【研修の方法】日 時：平成21年3月23日（月）午後5時30分～7時 対象者：看護職員15名（申し込み順）内容：1) アイスブレイキング「人生企画」2) 理念の分解（理念を自分なりに考える）3) 理念の統合（理念を日々の看護実践や仕事の中で具体的に実践するためのアイデアを考える）4) プレゼンテーション5) 事後課題（自分自身がこれから実践することを明らかにする）

【研修結果及び考察】申込み18名、実際の参加者15名であった。参加者を係長グループ1、スタッフ看護師グループ3の4つのグループに分け、研修内容1) は個人作業、2) 3) 4) についてはグループワークを実施した。5) については、個人の事後課題とした。終了後のアンケートで研修の感想を質問したところ「大変よかった」5名、「良かった」9名であった。今回のプログラムで良かった内容を聞いたところ「グループワーク」「グループのプレゼンテーション」と答えている者が多かった。参加者は、看護部の理念を図式化する作業に熱心に取り組んでいた。グループで理念を図式化する作業を通じて、自己の取り組むべき課題が明確になっていったと考える。

【まとめ】理念などのような抽象的概念を学ぶ際には、一度分解して考え、再統合するプロセスが必要である。また、経験年数や職場が違う者同士がグループワークすることにより、考えの幅が広がる。

## P9-304

### 革命！急変時に強い病棟作り

—YES, We Can!—

京都第二赤十字病院 看護部

○長井 茜、泉谷 佳代、川合 幹子、瀬戸口 二子

当病棟は、耳鼻咽喉科と呼吸器科の混合病棟である。耳鼻咽喉科において、局所麻酔下による内視鏡下鼻内手術から全身麻酔下での扁桃腺摘出術・耳手術の他、甲状腺腫瘍摘出術や喉頭摘出術、頸部郭清術等が行われている。その中で、術後合併症が出現する症例は少ないものの、術後出血や気道浮腫等出現すれば生死に直結する場合が多く瞬時に対応する必要がある。また、リスクの高い手術は時間を要するため、夜間帯に帰室するケースがほとんどであり、術後急性期を一般病棟の人員の少ない夜間帯で観察しなければいけない状況にある。

私たちは昨年、下咽頭腫瘍摘出術及び頸部郭清術の帰室直後に、気道浮腫及び術後出血による気道狭窄のため緊急気管切開術と止血処置を行った他、甲状腺腫瘍摘出術後の出血で止血処置を行った症例を経験した。その際、気管切開術等の処置に関する手順はあるが、緊急時に十分な活用ができず対応に困った。また、狭い器材庫で必要な物品が取り出し難い現状があった。病棟にはない物品を取り寄せる必要があり、処置を開始するまでに時間と人員を要した。その事例を通し、緊急時の対応の問題点についてSWAT分析を行った。

弱みとして(1)急変の経験が少ない(2)器材庫の物品配置により緊急時に必要なモニター等の器材が取り出し難い(3)止血処置等に必要な器材は保有しているが、使用方法が分からないことやイメージができず対応に困る(4)手順の十分な活用ができていないが挙げられた。

そこで、今後経験年数に関わらず、急変時に円滑に動ける病棟作りを目標とし、(1)器材庫やナースステーションの物品配置の変更(2)緊急時に必要な処置の理解を深めるためのシミュレーション(3)処置に必要な物品の整理と手順の見直しに取り組んだ。以上の経過について報告する。